

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：34509

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23730580

研究課題名(和文) 社会的スキルの観点による在日中国人留学生の日本文化適応に関する社会心理学的研究

研究課題名(英文) A study on social psychology in view of the social skills in adapting Japanese culture by Chinese International students.

研究代表者

毛 新華 (MAO, XINHUA)

神戸学院大学・人文学部・講師

研究者番号：90506958

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、在日中国人留学生の日本文化適応を「日本人との対人関係の形成」という視点から切り込み、適応の段階に沿って問題を検討し、最終的に、適応を促進する手段(社会的スキル・アプローチ)を講ずることである。

研究では、中国人留学生の日本文化適応についての特有なニーズについて、中長期滞在の留学生、そして留学生を世話・指導している日本人を対象に調査した。また、中長期の留学生を調査した結果を短期滞在の者の結果と比較した。さらに、留学生の日本文化適応の尺度の作成を試みた。その上で、「体験学習」の方法論に則って、適応を促進する訓練のプログラムを開発・実践を通して、プログラムの効果を検証した。

研究成果の概要(英文)：There are two primary purposes of this study. First is to clarify Chinese international student's adaptation of Japanese culture in view of their interpersonal relationships with Japanese. Second is to take steps in promoting their ability to adapt in such an environment. Chinese students who stayed in Japan for longer periods were investigated on what causes their distress in terms of interpersonal relationships with Japanese. Likewise, we collected opinions on the necessary skills that Chinese students needed to better communicate with Japanese from key persons who takes care or directs them. With these results, we developed a scale that can measure the level of adaptation. In order to promote the social skills of Chinese students with Japanese, we developed training programs in conformity with the methodology of Experiential Learning. Programs were carried out for Chinese students. The effects of programs were discussed through several scales in connection with cultural adaptations.

研究分野：社会心理学

キーワード：中国人留学生 文化適応 異文化 社会的スキル

1. 研究開始当初の背景

近年、グローバル化の進展と共に、日本で勉強する外国人留学生が飛躍的に多くなり、在日留学生の日本文化適応を促す必要性が高まっている。この問題に関する研究がさほど多くない中、田中・藤原(1992)や田中(2000)はいくつかの研究(岩男・萩原, 1988; モイヤー, 1987; 姚・松原, 1990 など)をまとめた上で、在日留学生の適応に最大の課題として、「対人関係の形成」を指摘した。さらに、田中らは、現実的・問題解決的方法(Furnham & Bockner, 1986; 斎藤, 1988)として社会的スキル(トレーニングによって向上可能な対人関係を円滑に運ぶスキル)のアプローチが、対人関係に関する異文化適応の促進に応用できると提唱し、留学生を対象とする自由記述・面接調査および質問紙調査を通して、質的・量的に在日留学生の対人関係を形成・維持する際の行動上の問題点をまとめた。また、留学生用のトレーニングの計画モデルも提案し、社会的スキル・トレーニングによる留学生の異文化適応に関する理論的な可能性を示唆した。

etic-emic アプローチに基づき、社会的スキルを、文化共通的部分と文化特有的部分に分けて考えた場合、留学生は文化共通の社会的スキル以外、自文化と異文化のそれぞれの文化特有の社会的スキルを備える必要がある。この過程において、留学生の自文化における歴史背景や社会システムなどの状況により、日本の文化・社会に対する認識が異なり、感じる困難さの側面も異なってくる(葛, 1999)。「『留学生』の適応」と言っても、留学生の出身する文化が違えば、適応上の問題点も大きく異なってくる。よって、留学生を文化ごとに特化する必要がある。

在日外国人留学生のうち、中国人留学生が総数の6割を占めている(平成21年文科省調)。また、中国人留学生と日本人および日本社会との間にトラブル(刑事事件など)が頻発し(孫, 2004)、しばしばマスメディアにも取り上げられている。トラブルには、経済の格差や語学能力の要因以外に、彼らの適応能力の多寡も大きな原因(榎木, 1996)とされている。そこで、本研究では、先行研究で指摘された留学生の日本文化適応に関する問題点を踏まえ、在日中国人留学生に焦点をあて、彼らの対人関係に関する日本文化適応を向上させる方略を探る。

異文化適応のプロセスについては、古くから Lysgaard(1955)の U カーブ理論がある。それによると、異文化への適応過程は滞在日数の経過に伴って、「ハネムーン期」、「憂鬱期」、「回復期」、「適応期」という U 字型曲線をたどる。周(1995)の在日中国系留学生を対象とした研究においては、滞在期間によって日本文化への適応状況が変化すると指摘した。滞在の長さ、すなわち期間により異文化適応に必要な社会的スキルの種類や難易度が異なることを示唆している。

2. 研究の目的

以上のことを踏まえ、本研究の目的は、在日中国人留学生に焦点を当て、彼らの日本文化適応を「日本人との対人関係の形成」という視点から切り込み、適応の段階に沿って問題を検討し、最終的に、適応を促進する手段(社会的スキル・アプローチ)を講じることである。

研究目的に照らし合わせて、以下の研究を設定する。

- (1) 中国人留学生の日本社会における「日本人との対人関係の形成」に関する特有な問題点を時期ごとに検討する。
- (2) 上記の(1)で得られた知見に基づき、日本文化適応の SST プログラムの編成・実践を行う。

3. 研究の方法

目的で言及した(1)を明らかにするために、日本に中長期に滞在する中国人留学生、そして留学生を世話・指導する日本人のそれぞれから調査した。(2)については、異文化適応のプログラムを編成し、中国人留学生を対象にトレーニングを行った。

- (1)の 中国人留学生の日本文化適応の問題点を明らかにするために、中長期に滞在する中国人留学生を対象とする調査および短期滞在者との比較

調査対象者と実施期間 日本の大学院で在学する、あるいは留学を経て日本で職に着いたなど、長く日本に滞在する経験を持つ中国人 47 名(男性 17 名、女性 30 名; 平均年齢 34.36 ± 7.46 ; 現在の職業構成については、教育関係者 11 名、会社員 19 名、大学院生 12 名、無職 5 名。日本での滞在年数は 3.9 年 ~ 24.3 年の幅があり、平均年数は 11.16 ± 4.78 年)を対象に、2013 年 1 月から 2 月にかけて自由記述調査を行った。調査内容 質問紙調査を行った。日本人との人間関係を中心内容とした以下の 4 つの質問を設定し、簡条書で回答を求めた。

同級生や同僚とつきあう際、日本人が中国人と異なると思った点は何か

同級生や同僚とつきあう中で、日本人があなたを「困らせた」点は何か

あなたから見た日本人同士(同級生や同僚)のつきあいの特徴は何か

日本人の同級生や同僚と友達になりたい時、どうすればいいと思うか

分析方法 4 つの自由記述の質問項目に関しては、KJ 法(川喜田, 1986)に基づき、本研究の目的の知らない中国人 1 名(在日年数 13 年)および中国人の大学教員 1 名(社会心理学専攻、在日年数 16 年)が協議をしながら、回答の分析・整理を行った。

- (1)の 中国人留学生の日本文化適応の問題点を明らかにするために、日本人を対象とする調査

調査対象者と実施期間 関西圏にある大学、日本語学校、そしてボランティアとして中国人留学生と関わりのある留学生を指導・世話する立場にある日本人 43 名(男性 15 名, 女性 28 名; 平均年齢 49.29 ± 10.46; 大学・日本語教育機関教員 32 名, 職員は名, 留学生を世話するボランティア 3 名, 大学院生 1 名; 中国人留学生と接している年数は 2 年 ~ 40 年の幅があり, 平均年数は 17.32 ± 9.29 年)を対象に, 2013 年 2 月に自由記述調査を行った。

調査内容 無記名式の自由記述の質問紙を用いて調査を行った。毛(2010)の質問項目と統一し, 中国人留学生の日本人との人間関係を中心内容とした 4 つの質問を設定し, 箇条書で回答を求めた。

日本人との対人関係の面においては, 中国人留学生が日本人と異なる点は何か

中国人留学生があなたを困らせたことはどういったような点か

中国人留学生と比べた場合, 日本人同士の対人関係の特徴は何か

中国人留学生は日本人との対人関係がよりスムーズになるには, アドバイスをください

分析方法 4 つの自由記述の質問項目に関しては, KJ 法(川喜田, 1986)に基づき, 本研究の目的の知らない中国人 1 名(在日年数 13 年)および中国人の大学教員 1 名(社会心理学専攻, 在日年数 16 年)が協議をしながら, 回答の分析・整理を行った。

(1)の 上記の(1)の と(1)の を総合して, 中国人留学生自身と日本人の意見を比較することを通して, 日中双方が認識した問題点のギャップを明らかにする。

(1)の 上記の(1)の ~ (1)の の研究で整理された問題点を尺度化して, 中国人留学生の日本人との対人関係における適応課題の次元を明らかにする

調査対象者 2013 年 12 月 ~ 2014 年 3 月, 関西にある複数の大学, 大学院, 日本語学校に在籍している中国人留学生, そして, かつて留学経験のある中国人留学経験者 135 名を対象とした。有効回答は 133 名(男性 54 名, 女性 79 名; 平均年齢 24.65 ± 4.45 歳)であった。

調査項目 前述した中国人留学生および彼らを指導・世話する日本人への調査から得た中国人留学生における日本的対人関係適応の課題点リストに基づいて整理した 81 項目を用いた。また, 調査対象者の年齢, 性別, 所属の学校・大学, 来日してからの期間などの項目を加えた。さらに, 尺度の併存妥当性を検討するために, 中国人大学生社会的スキル尺度 ChUSSI (9 件法, 41 項目, Mao & Daibo, 2006), KiSS-18(社会生活で一般に必要なと考えられるスキルのリスト, 5 件法, 18 項目, 菊

池, 1988)および, ACT (非言語的なメッセージを表出するスキルのリスト, 9 件法, 13 項目; Friedman, Prince, Riggio, & DiMatteo, 1980), そして, 日本的対人コンピテンス尺度 JICS(5 件法, 22 項目, Takai & Ota, 1994)も併せて回答を求めた。

(2) 中国人留学生を対象とする異文化適応トレーニング

トレーニングの対象者 関西の日本語学校に在籍している中国人留学生 7 名(男性 2 名, 女性 5 名, 平均年齢 23.25 ± 4.76 歳, 来日してからの期間は 0.45 ± 0.23 年, 日本語の勉強歴は 0.85 ± 0.38 年)を対象とした。

トレーニングのプログラムおよび実施 本研究は毛(2011)で考案されたプログラムを用いた。プログラムは, 1. 「文化共通のスキル」と, 2. 「日本文化に適応するためのスキル」のそれぞれを促進する部分をもつ体験学習の形をとった。6 セッション(1 セッション 1 時間)で構成した。1. は, 大坊・中野・栗林(2000)や Mao & Daibo(2007)が用いたプログラムを参考にしながら, 参加者の「人とのコミュニケーションをとるための言語的/非言語的なスキル(e.g. 視線・表情の使い方, 自己表現)」「集団の中で人と関わるスキル(e.g. 主張と譲歩)」など, 一般の生活における基本的な(文化一般の)社会的スキルをトレーニングのターゲットとして設定した。一方, 2. は, 毛(2014a, b, c)で明らかにした, 留学生にとって日本人との対人関係適応に必要な内容(話し方, 接し方など)を, 八代・町・小池・吉田(2009)で紹介された異文化適応のシミュレーションに載せ, 参加者の「文化間の違いを捉えるスキル(e.g. 異なるルールを発見する力, 対処の仕方)」「文化間摩擦に対応するスキル(e.g. 行動の裏にある考え方を理解する方法)」「援助の獲得やストレスの解消に関するスキル(e.g. ソーシャル・サポートを得る方法, リラクゼーションの方法)」など, 異文化としての日本社会で人付き合いに用いる社会的スキルをトレーニングのターゲットとして設定した。

社会的スキルの測度 プログラム実施の開始前と終了直後において, 下記の自記式の尺度を用いて, 参加者の社会的スキルのレベルを測定した。a. 中国人大学生社会的スキル尺度(前出), b. KiSS-18(前出)および, ACT(前出), c. JICS(前出)。本研究では, a ~ c までの尺度の内容を, 順に中国文化, 共通文化, 日本文化の社会的スキルを反映するものと位置づけた。そのほかに, d. 「中国人留学生における日本的対人関係適応尺度」(「関係円滑化の実現への努力」などの 5 因子; 毛, 2014)。e. 滞在国の対人スキル獲得尺度(田中, 1998)。f. 異文化適応感尺度(「心身の健康」などの 4 因子; 植松, 2010)。g. 在日中国系留学生用ソーシャル・サポート尺度(周, 1993)。

4. 研究成果

(1)の 質問 , で得られた記述は中国人の認識した日本人との対人関係の特徴と問題点に関する意見であり, 質問 は(中国人が備えていない)日本人同士の対人関係の特徴に関する意見であり, 質問 は中国人が日本人と円滑な対人関係を結ぶための解決策の意見である。4つの質問にこのような関連性があるため, 一つの特徴や問題点に対して, 日本人の特徴, 対応策という対応関係に基づき整理を行った。

毛(2010)で得られた「和の維持」, 「日本の特性」, 「距離感」, という3つのカテゴリーに対応して整理した。 においては, 中国人は日本人の「礼儀正しい」, 「上下関係」, 「話が婉曲」, 「他者や周りとの協調」など, 互いの「和」を維持する行動に注目している。これらの行動は中国人もするが, 日本人がより表出する分野だと考えられる。 については, 「公私に境界線」, 「ルールや時間などの遵守」, 「まじめな態度」など, 中国人にとって日本の対人関係に独自に存在する特徴を注目している。 については, 「割り勘」, 「関係があっさり」, 「友情の発展に時間がかかる」など中国人にとって対人関係の親密化に阻害となる要因が注目されている。

本研究でまとめたカテゴリーは毛(2010)で得たものとすべて重複しているため, 両者の統合が可能だと考えられる。一方, 両者の比較から, 経験年数の多さに伴う回答が多く見られた。例えば, 日本人の建前と本音の使い分け行動に対して, 短期滞在者はネガティブに認識するのに対して, 中長期滞在者はより中立的に考えている。また, 対人的親密さについては, 本研究の中長期滞在者の方は「時間が必要」や「距離が大事」などより本質的な部分を着目している。

(1)の 質問 , で得られた記述は中国人留学生の日本人との対人関係の特徴および問題点に関する意見であり, 質問 は(留学生の不足している)日本人の対人関係の特徴の意見であり, 質問 は中国人留学生が日本人とよりよい人間関係を結ぶための解決策の意見である。4つの質問のこれらの関連性から, 記述をまとめる際には, 留学生の一つの特徴や問題点に対して, 日本人の特徴, そして問題点の解決策という対応関係に基づき整理を行った。

上記の手続きにより, すべての記述から, 中国人留学生の日本人との対人関係における特徴や問題点について, 「表出の仕方の特徴」, 「相手や周りの他者への配慮不足」, 「社会的規範」, 「個人的な性質」という4つのカテゴリーをまとめることできた。集計できた記述の数から, 「表出の仕方の特徴」においては, 留学生の「自己主張」, 「直接的な表現」, 「距離感の近さ」が特徴的なものである。「相手や周りの他者への

配慮不足」では, 「自己中心的」, 「度を越えた要求」, 「相手の都合を考えない」などが特徴的なものになっている。「社会的規範」では, 「約束や時間を守らない」, 「ルール守らない」といった点は目立っている。「個人的な性質」では, 「倫理観の欠如」という点は特徴的であった。

(1)の 前記の(1)の の日本人の意見のカテゴリーをベースに, (1)の でまとめた中国人留学生自身の意見をそれに照らし合わせた。「表出の仕方の特徴」, 「相手や周りの他者への配慮不足」, 「社会的規範」, 「個人的な性質」という4つのカテゴリーに, 多くの項目には, それぞれの立場からの意見に対立が見られた。また, 対立になっていなく, 互いに独立した意見もあった。

「表出の仕方の特徴」において, 日本人は, 「中国人留学生がより直接的・主張的で, 協調性が不足している」と認識しているのに対して, 留学生は, 遠回しの言い方, 主張しない, 周りに合わせる, そして人と距離を置くといった行動が日本人の特徴であると認識しつつ, 違和感を覚えている。「相手や周りの他者への配慮不足」において, 日本人は「留学生が相手の都合を考えない」などの内容が中心的な意見であった。これに対して, 留学生はこのような様々な面に配慮しないといけないというやり方に不適應感を示している。「社会的規範」については, 日本人から, 留学生のルール・時間・約束に対するルーズさを指摘したのに対して, 留学生は日本人が時間・ルールに厳しすぎるとの意見を持っているようである。また, 日本特有なお礼とお返しの仕方や割り勘などのやり方に対しては特徴的だと認識している。「個人的な性質」について, 日本人から, 留学生の「上下関係意識の薄さや誠実さの不足, プライバシーへの無視」などについて指摘しているが, これらのポイントについて, 留学生も認識していると言えよう。また, 日本人から, 独自に中国人留学生の自信過剰やアドバイスを聞き入れないなどの問題点を指摘している。また, いずれのカテゴリーで現れた問題点の解決策については, 留学生と日本人との認識は多く一致している。

本研究を通して, 留学生の日本人との対人関係について, 留学生自身と日本人側との間の認識の違いをいくつかの側面から明らかにした。留学生が違和感・不適應感を覚えるところ, 特徴だと思っている部分, そして, 留学生自身が意識していなく, 日本人側が指摘しているポイント, さらに解決策にあげられているポイントは留学生の適應の課題点だと言える。

(1)の 上記の(1)の ~③の結果からまとめた候補となる 81 項目に対して, 繰り返し因子分析を行った結果, 45 項目が残り,

固有値の減衰状況や解釈の可能性から、「関係円滑化の実現への努力」、「積極的なコミュニケーション」、「率直性と親密さへのこだわり」、「日本人を受け入れない感覚」、「ストレス感覚」という5因子が抽出された。

併存妥当性 得られた因子は既存尺度との相関係数を調べた。相関分析の結果から、日本人との人間関係を円滑化する努力には、文化一般の基礎スキル、中国で蓄積してきた中国人との対人関係、そして日本人との人間関係に自分を抑制し、相手との上下関係を意識することが重要な役割を果たしていることがわかった。また、日本人と積極的にコミュニケーションをすることは、当人の全般的に高い社会的スキル、中国人との上手い対人関係スキルや日本人に上手くメッセージを伝達するスキルが必要であることがわかった。

来日してからの年数との関係 「関係円滑化の実現への努力」因子と「積極的なコミュニケーション」因子、そして「日本人を受け入れない感覚」因子のいずれにおいても、長期群の方は短期群より得点が有意に高くなっている。中国人留学生は在日の期間が長いほど日本人との関係の円滑化と交流を進めようとすると同時に、日本人との対人関係に多くのストレスも抱えている。

- (2) 参加者のそれぞれの尺度(因子)におけるトレーニング前後の得点変化を検討した。その結果、日本文化を反映した社会的スキル尺度 JICS の5因子のうち、「察知能力」、「上下関係の調整」において、トレーニング後の得点が前より有意に高くなっている。一方、中国人大学生社会的スキル尺度に有意な変化がみられなかった。以上の結果から、このプログラムは留学生の中国的なスキルに影響せず、日本的なスキルの向上に役に立つと考えられる。

また、滞在国の対人スキル獲得尺度、中国人留学生における日本的対人関係適応尺度の「関係円滑化の実現への努力」因子も、トレーニング後の得点が前より高くなっている。日本人との対人関係を円滑させるノウハウもプログラムに含められていることにより、参加者のスキルの獲得や対人関係円滑化の注意点に関する意識レベルの変化の現れだと考えられる。

一方、異文化適応感尺度の「心身の健康」因子とソーシャル・サポート尺度の「環境・文化」因子について、トレーニング後の得点は前より低くなっている。本研究の参加者は来日してから半年ぐらいの者である。異文化適応のプロセスで考えた場合、ハネムーン期を過ぎて、ショック期に入る頃でもある。適応時期のことを考えた場合、身心的に不安定で、得られたサポートは心理的に少なく感じた可能性が考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

毛新華・大坊郁夫 中国文化の要素を考慮した社会的スキル・トレーニングのプログラムの開発および効果の検討 パーソナリティ研究 査読有 21 巻 2012 年 pp.23-39.

DOI: <http://dx.doi.org/10.2132/personality.21.23>

〔学会発表〕(計 24 件)

Xinhua MAO & Ikuo DAIBO Effects of Social Skills Training from a View-point of Nonverbal Channels. July, 2011 The 9th biennial conference of the Asian Association of Social Psychology, Kunming, China.

Masanori Kimura & Xinhua MAO How do Chinese people communicate with their friends?: An experimental study focused on dyadic interaction by female friends. July, 2011 The 9th biennial conference of the Asian Association of Social Psychology, Kunming, China.

毛新華・木村昌紀 社会的スキル・トレーニング(SST)プログラムの文化的効果性に関する検討 - 中国文化要素が配慮されたプログラムを日本人大学生に実施した結果から - 日本グループ・ダイナミック学会第 58 回大会 2011 年 8 月 昭和女子大学

木村昌紀・毛新華 対人コミュニケーションの日本・中国間比較研究—両国の円滑な異文化交流に向けて— 日本グループ・ダイナミック学会第 58 回大会 2011 年 8 月 昭和女子大学

鈴木一代・小林亮・毛新華・植松晃子・佐野秀樹・松下美知子・手塚千鶴子 ワークショップ 在日中国人学生の日本文化適応に関する検討: 異文化交流とアイデンティティ(3)—留学生研究の最前線— 日本心理学会第 75 回大会 2011 年 9 月 日本大学

毛新華・木村昌紀 中国文化要素が配慮された SST プログラムの日本人大学生への効果—自己・他者評定による行動レベルの検討— 日本感情心理学会第 19 回・日本パーソナリティ心理学会第 20 回 合同大会 2011 年 9 月 京都光華女子大学

木村昌紀・毛新華 友人関係の対人コミュニケーションに関する日本・中国間比較研究 日本感情心理学会第 19 回・日本パーソナリティ心理学会第 20 回合同大会 2011 年 9 月 京都光華女子大学

毛新華 在日中国人学生を対象とする異

文化適応スキル訓練のプログラムおよびその効果 日本社会心理学会第 52 回大会 2011 年 9 月 名古屋大学

毛新華・木村昌紀 日本人大学生に実施した中国文化要素が配慮された SST プログラムの持続効果 日本心理学会第 76 回大会 2012 年 9 月 専修大学

⑩木村昌紀・毛新華 初対面会話の自己呈示に関する日本・中国間比較 日本心理学会第 76 回大会 2012 年 9 月 専修大学

毛新華 在日中国人学生の異文化適応スキル訓練の持続効果 日本社会心理学会第 53 回大会 2012 年 11 月 筑波大学

木村昌紀・毛新華 初対面のコミュニケーションに関する日本・中国間比較研究 日本社会心理学会第 53 回大会 2012 年 11 月 筑波大学

木村昌紀・毛新華 日本人と中国人の親密なコミュニケーション何が違うか?—未知関係と友人関係を対象にした検討— 日本感情心理学会第 21 回大会 2013 年 5 月 東北大学

Xinhua MAO & Masanori Kimura The Cultural Effects of Chinese-culture Social Skills Training Programs: When the Participants Are Japanese. July, 2013 The 13th European Congress of Psychology. Stockholm, Sweden.

Masanori Kimura & Xinhua MAO What are the differences of interpersonal communication with friends between Japanese and Chinese people? July, 2013 The 13th European Congress of Psychology. Stockholm, Sweden.

Xinhua MAO & Masanori Kimura Do Chinese-culture social skills training programs have effects on the change in behavior?: A study using Japanese participants. August, 2013 The 10th biennial conference of the Asian Association of Social Psychology, Yogyakarta, Indonesia.

Masanori Kimura & Xinhua MAO What are the differences of interpersonal communication with strangers between Japanese and Chinese people? August, 2013 The 10th biennial conference of the Asian Association of Social Psychology, Yogyakarta, Indonesia.

木村昌紀・毛新華 日本人と中国人の討議的コミュニケーションは何が違うのか?—未

知関係と友人関係を対象にした実験的検討— 日本心理学会第 77 回大会 2013 年 9 月 北海道医療大学

毛新華 日本人から見た在日中国人留学生の文化適応の問題点 - 日本人を対象とする自由記述調査のデータより - 日本社会心理学会第 54 回大会 2013 年 11 月 沖縄国際大学

毛新華 中国人中長期滞在者の抱える日本文化適応上の問題点 - 短期滞在者の自由記述調査の結果との比較 - 日本社会心理学会第 55 回大会 2014 年 7 月 北海道大学

⑫毛新華 中国人留学生の日本文化適応の課題点に巡る留学生自身と日本人の意見の異同に関する比較研究 日本グループ・ダイナミック学会第 61 回大会 2014 年 9 月 東洋大学

⑬毛新華 中国人留学生における日本的対人関係適応尺度の開発の試み 日本心理学会第 78 回大会 2014 年 9 月 同志社大学

⑭Xinhua MAO & Masanori Kimura The holding effects of Chinese cultural social skills training programs to Japanese undergraduates participants. February, 2015 The 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology. Long Beach, CA, U.S.A.

⑮Masanori Kimura & Xinhua MAO What are the differences of interpersonal communication between Japanese and Chinese people? : Experimental study with strangers and friends. February, 2015 The 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology. Long Beach, CA, U.S.A.

〔図書〕(計 2 件)

毛新華 ナカニシヤ出版 「第 11 章 文化における社会的スキルの役割」 (「幸福を目指す対人社会心理学-対人コミュニケーションと対人関係の科学-」 大坊郁夫 編) 2012 年 pp.246-270.

毛新華 福村出版 「部パーソナリティと社会・文化 20 章第 4 節 社会的スキルの個人差・文化差」 (「パーソナリティ心理学ハンドブック」 日本パーソナリティ心理学会 企画) 2013 年 pp.635-641.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

毛 新華 (Mao Xinhua)
神戸学院大学・人文学部・講師
研究者番号: 905069